

9 短節間ミニトマトの房どり栽培

ねらいと成果

ミニトマトの栽培では、大玉トマトに比べて収穫や長期間栽培でのつる下ろしに多大な労力がかかる欠点がある。そこで、節間が短く房どりができる長野県中信農試で育成中の短節間ミニトマトについて栽培試験を行った。

短節間ミニトマトは、従来のミニトマトより約30%短い節間で、同じ草丈での収穫果房数は約40%増加した。短節間ミニトマトの果実糖度は、8前後であり、対照品種と比べて遜色なかった。草丈を180cm程度と見込めば、つる下ろしせずに10段以上の収穫が可能であった。また、果房が短く裂果が少ないため、房どり収穫が可能で、収穫作業の軽作業化が図られ、また新しいタイプのミニトマトとして、ブランド化が可能だと考えられた。

内 容

供試品種・系統は、表に示した短節間2系統と対照として従来の品種「千果」、「サンチェリー2」で、NFT養液栽培を行った。いずれの品種とも直立に誘引して、草丈が150cmになるまで収穫を行った。また、短節間ミニトマトは、開花後1果房を15~16

果に制限して房どり栽培を行った。

短節間ミニトマト系統は、8~9段の果房が収穫できたが、「千果」では5段までの収穫となった。

1果重は「千果」の17g弱に対し、短節間ミニトマト系統では11g程度とやや小振りで、「サンチェリー250」とは同程度であった。

収穫段数と1果重の関係から、収量を求めると、短節間ミニトマト系統は、対照品種の「千果」「サンチェリー250」を上回った。

果房全体が着色するまで置いた場合の裂果率は、「千果」の36%に対し、短節間ミニトマト系統では15~18%と小さかった。

短節間ミニトマトの果実糖度は、8前後であり、「千果」「サンチェリー250」と比べて遜色なかった。

今後の方針

短節間ミニトマトは、現在系統適応性検定試験が行われている。2008年以降、品種登録される見込みで登録後新商品として栽培を普及させる。

竹川 昌宏 (農業技セ・園芸部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2425)



図1 ブドウの房のような短節間ミニトマト



図2 短節間ミニトマトの着果状況

表 短節間ミニトマト系統の収量、品質

品種・系統	収穫段数	草丈 cm	総収量 kg/10a	1果房重 g	1果重 g	裂果率 %	糖度
短節間ミニA	9.0	146.3	481.3	171.1	11.4	15.0	8.4
短節間ミニB	7.8	148.3	466.6	192.7	11.5	18.8	7.6
千果	5.0	143.0	421.1	269.5	16.7	36.0	8.0
サンチェリー250	6.8	143.0	368.2	181.2	11.8	26.1	8.5

注) 収穫段数、総収量は草丈が150cmになるまでの果房数と収量。は種：2月22日、定植：3月30日。